

担い手の確保と生産性の向上の好循環を目指して

建設業就業者数は、ピーク時（平成9年：685万人）から現時点（令和6年：477万人）の約30年で約3割減少し、全産業に占める割合も10.45%から7.03%と減少している。また、ピーク時の平成9年には、55歳以上と29歳以下の就業者の割合は、それぞれ24.1%、22.0%で大きな差はなかったが、令和6年には、36.7%、11.7%と3倍以上に開き、急速に労働力の減少と高齢化が進んでいる。

各産業部門も長期的に見れば、同じ傾向が生じてくると考えられるが、建設業が先行して、しかも先鋭化して現象が見られている。見方によっては、建設業は他産業に先駆けて人口減少問題に対応しているとも考えることもできる。

今後の生産年齢人口の減少を考えれば、現在3人でやっている仕事を2人でこなせるようにしなければ、事業量（生産量）が減少していくことになる。長期的・マクロ的に見れば、全産業（どの職場）にも共通した課題である。

本誌読者は、公務員がほとんどと思われるが、担い手の確保や生産性の向上は、我々の職場（役所）だけの課題ではなく、広い意味で建設業界（インフラ整備にかかわる業界）全体としての課題であり、将来にわたって安定的にインフラ整備を行うためには、一体となって取り組む必要がある。

建設業界については人気がないと言われ、このことが担い手不足に拍車をかけていると考えがちであるが、いくつかのHPで建設業、公務員の人気ランキングを確認してみると、それほど不人気

というわけではない。

高卒就職採用サービスを手がけている株式会社ジンジブが公表している「現役高校生が選ぶ、「なりたい職業ランキング」2024」において、「働きたい「業界」ランキング」（n=1,413）では、建設・建築業界4位（8.6%）、公務員8位（6.4%）と上位にランクインしている。「なりたい「職業」ランキング」（n=1,413）では、公務員7位（3.1%）、建設現場職10位（2.7%）となっている。母集団が高校生を対象とした職業体験イベント参加者であることを考えると、高卒で就職を希望する学生の考えを強く反映しているといえる。

一般社団法人全国高等学校PTA連合会、株式会社リクルート合同調査「第11回高校生と保護者の進路に関する意識調査」（2023年報告書）の「なりたい職業ランキング」では、高校生（n=919）の回答は、公務員4位（7.3%）、技術者・研究者10位（3.4%）、建築士・建築関連12位（2.7%）、保護者（n=169）はトップ（1位）が公務員（22.5%）となっている。

統計、母集団によって差は大きいですが、ものすごく不人気というわけでもないことはいえる。では、担い手の確保の上で何が課題か？といえば、人材を送り出す側に正しい情報が伝わっているのか、学生に正しい情報に基づく選択の機会を提供できているのか、ではないかと考えている。

前職（中部地方整備局長）においては、専門工事業の業界団体と連携して、半年ごとに工業高校、専門学校の学生を対象に、専門工事業12～13職

国土交通省 国土技術政策総合研究所長

さとう ひさのぶ
佐藤 寿延



種（型枠、鉄筋、とび、内装、タイル…）を体験するフェアを実施し、現在までに11回開催した。毎回300名程度の学生が、希望する4職種について座学・実技を通して体験する。ポイントは、学生だけでなく、先生も一緒に参加していただける点である。専門工事業の方々にお聞きすると、このフェア開催以前は、就職担当の先生ですら建設業への就職は大工というイメージしかなく、専門業種ごとに分かれていることを知らなかったが、今では、各業種の特性を理解した上で、学生の個性にあわせて、適切なアドバイスをいただけるようになったとのことである。

ランキングを見ても、建設業に対するイメージが極端に悪いわけではなく、人材を送り出す側にきちんとアプローチしていくことが重要である。これは、大卒の人材についても同じと考えている。

生産性の向上の観点から見れば、建設業の特徴は、現場での作業であり、労働集約型である。インフラを支える公務員の仕事も、各方面との調整等を考えれば、労働集約型もしくは知識集約型といえる。いずれも「人の力」、「人の技能」といった「人」中心である点が共通である。

「人」中心の作業の生産性を上げるのは非常に難しい。なぜならば、人の能力が急激に向上するわけではないからである。方法としては「人」の能力を他（例えば機械）に置き換える、「人」を補助することにより、効率を向上させることが考えられる。また、作り方を変えるという手段もある。

前者の代表が、建設機械による完全な自律化・自動化施工であると考えている。ダム事業の一部作業（ダム本体の打設）などでは実用化されているが、今後、様々な工種に広がっていくことで、広く生産性が向上してくる。

人の補助の最たるものはAIだと考えている。今回の原稿は、さすがにAIは使わなかったが、簡単な挨拶文などは、基礎的データを網羅した形でひな形を作ってくれ、これに自分の言いたいことをミックスさせれば、比較的短時間で作成できる。従来は自分でインターネット検索していたことを考えると、AIが勝手に検索して、結果を整理してくれることは、調べる時間（出典を確認する必要があるが）の大きな短縮につながっていると、AIを活用している読者の方々も感じているのではないか。

労働集約型産業も知識集約型産業も、ようやく、機械化や情報化のレベルが高度化し、生産性の向上を図ることへの芽が出てきた段階であると考えている。

建設業やインフラ整備にかかわる仕事は、他の製造業とは異なり、自然を相手にした一品生産であることから、いくら生産性の向上を図っても、労働集約的・知識集約的な部分は残らざるを得ない。逆に、それが、高技能・高クリエイティブなものとして特化していくはずである。生産性の向上が、より魅力的な職業としての建設業等を浮き彫りにし、担い手の確保につながる好循環が生まれることを期待したい。

【著者紹介】佐藤 寿延（さとう ひさのぶ）

平成3年京都大学大学院工学系研究科修了、建設省入省。国土交通省関東地方整備局湯西川ダム工事事務所長、関東地方整備局河川部長、水管理・国土保全局河川計画課長、大臣官房技術審議官、中部地方整備局長等を経て現職。